

Title	古代巴蜀史の再構成：傳承時代
Author(s)	狩野, 直禎
Citation	東洋史研究 (1975), 33(4): 579-603
Issue Date	1975-03-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/153567
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

古代巴蜀史の再構成

——傳承時代——

狩野直禎

目次

序

- 一 地理的範圍
- 二 華陽國志と揚雄本紀
- 三 三皇と蜀
- 四 五帝と蜀
- 五 西周と蜀
- 六 蜀第一王朝
- 1 概論
- 2 蠶叢
- 3 柏灌・魚鳧
- 4 杜宇
- むすび

序

巴蜀の地が、秦の支配下に入り、中原を中心とした歴史の展開の中にくみ込まれていくのは、紀元前四世紀も末のころ

である。従ってそれ以前の古代巴蜀史を再構成するためには、我々は書經・春秋左氏傳などの經書類に斷片的に見られる、關連記事を利用するか、或いは紀元四世紀の中葉に編纂された「華陽國志」によるしかない。そうでなければ、地下から發掘された考古學的遺物・遺跡によらざるを得ない。しかし巴蜀の考古學的遺物遺跡に對しても、從來これを系統的に整理し、或いは編年したもののあることをあまり聞かない。私の知見する所では、Cheng Tè-k'un "Archaeological Studies in Szechwan" (1957, Cambridge University Press) 一書のみである。この書は四つの部分よりなるが、その Part I が Prehistoric Archaeology of Szechwan にあつられており、また Introduction の部分に 5000 B.C. より A.D. 1900 に至る約七千年間を四川省發掘の遺跡、遺物により編年を行っている。この編年は、氏が "Archaeological Chronology of Szechwan" (Antiquity, No. 81) London, 1947." ですでに發表したものにもとづくと思われる。鄭氏が Antiquity 誌上に載せられた論文は、水野清一氏によって我が國に紹介され、「東亞考古學の發達」(大八洲出版、一九四八。頁二四〇～二四五) に見ることが出来る。この書は勿論、中華人民共和國成立以後の新しい材料は使っていない^①。一九四九年以前の出土資料も、鄭氏自身が發掘調査されたものは非常に少い。氏はダイ・グラハム・ネルソン等の諸氏が收集された遺物に依據し、遺物そのものは實見されたにせよ、その出土狀況など客觀的データが不充分的な材料を、そのまま使用されているという不確實さを伴っている。

かくの如く、巴蜀古代史の再構成は、史料的に見て甚だ困難なものを含んでおり、以下の論述も、推論と誤解に充ちたものとなることを恐れるのであるが、この問題と取組んでみたい。

一 地理的範圍

私が以下に扱う地域、四川と記し、或は巴蜀と呼ぶ地域は、現在の四川省東部の盆地（リヒトホーフーンの言つた Rothe Becken）を指すもので西部の高原（舊西康省）を含まないと理解して頂きたい。この西部高原は漢民族を中心と

した歴史を考えると、いかなる時代においても、重要な舞臺を提供しなかったと考えるからである。この地域の研究は少數民族史の専門家に委ねなければなるまい。言葉を變えて繰返すならば、邛崃山脈、大涼山脈、大婁山脈、巫山山脈、大巴山脈の諸山脈によって取りかこまれた地域を考察の對象としていきたい。

さてこの地域、一口に巴蜀というが、西の部分が蜀であり、東が巴であつて、かなり對立した地域であつたようである。その原因としては長江の本流を除いて、この地域の河川の大部分が北から南に流れていることから推察し得るよう、自然的條件に左右されることが先ず考えられる。また住民の民族系統も違つていたのであろう。

そこで西から順次この地域の河川を概観しておきたい。何故なら、古代においてこの地域の交通、従つて文化の傳播も、この河川沿いになされたであろう公算が大きいし、またこれら諸河川を分つ山地が巴と蜀の對立といったことを生み出す原因にもなつたと考えられるからである。

四川省東部盆地のいちばん西を流れる川は、岷江である。言うまでもなく、尙書禹貢に、

岷山導江

と見える江がこれに當り、古くからその存在が知られておるとともに、清朝の末まで、長江の本流と考えられていた。岷江は四川省の西北、岷山山系の南斜面から流れ出て、松潘・茂・灌の諸縣を過ぎて、多くの分流をなし、成都平原を潤し、やがて彭山附近で再び一本の流れとなり、樂山を過ぎ宜賓において長江本流に入る。

この岷江に樂山において西方から流れ込むのが、大渡河である。大渡河は古くは猱水・猱水・沫水などと呼ばれたものであり、水經注には沫水として記されている。岷山の西南に發源し、石棉まで南流して、ここから東に向つて岷江に合流するが、上流は大金川と呼ばれ、小金川を合わせて大渡河となり、さらに青衣水を合わせるわけである。青衣水は雅江とも呼ばれ、雅州に源を發し、峨眉山よりの諸溪流を合わせて大渡河に入る。その水は名の如く青色を帯びた清流であるという。青衣水の名も水經注に見え、

青衣水出青衣縣西、……縣故青衣羌國也、

とあり、古來羌族の活動する所で、羌族の侵入路として利用されたようである。

岷江の東にあるのが沱江である。沱江は綿竹縣西北の紫石山に發するものを本流とし、德陽を経て岷江よりの一分流を合わせ、簡陽、資陽、資中、內江、富順をへて、富順において榮溪（中溪河）を合わせ、さらに思濟河（沱水）を合わせて、瀘において長江本流に入る。書經禹貢に

沱潛既道

とあるのが、この沱江をさすものとされている。

つぎに重慶において長江に北から流れ込むのが嘉陵江である。この川は合川において西からの涪江、東からの渠江を合わせるので、嘉陵江の西側の支流である涪江から述べる。

涪江は四川省松潘の東北に發するから、岷江と水源において近よっているが、岷江と涪江の水系を分けるのは、岷山々系の一である鹿頭山脈である。

さて涪江は綿陽、三台を過ぎ、射洪附近にて梓潼河を合わせ、遂寧を経て合川にいたる。

嘉陵江の本流は劍門山脈によって、涪江と隔てられているが、上流は二つに大きく分れる。西側のものは白龍江といい、岷山に發して東南流してくる。一方陝西省鳳縣に源流する西漢水は略陽を経て、昭化に於いて白龍江と合し、閬中、南充を経て、合川において涪江と渠江を合わせ重慶にいたる。閬水、渝水とも呼ばれ、四川省東部の中央を流れる大河である。

渠江は巴山山脈以南の水を集めたもので、上流はまず大きく巴水・渠水の二つに分れる。巴水はさらに東河・西河に分れる。東河は大巴山盤龍嶺の東に發し、西河は大巴山に出て通江を経て、兩江は合する。さらに巴水は江口で南江と合する。この南江は南江縣東北に發し、巴中を経て江口にいたるものである。一方渠水は前江・中江・後江の三流に分れる。

が、前江は陝西省界の金城山に、中江は白支山に、後江は星子山にと、いずれも萬源縣近くに發し、宣漢附近で三流は合し、さらに三滙で巴水と合流して、合川にいたる。

以上四川省東部を南流して長江に注ぐ支流について述べた。これに對して南から北流して長江に注ぐもの、例えば黔江の如きがあるが、ここでは觸れない。四川省においては、東部・西部を問わず、西より東に流れる川は長江しかなく、長江によってのみこれらの南北に流れる川は結ばれるといつても過言ではあるまい。しかし、南北に平行する川を結ぶ陸路も全く存在しなかつたわけではなからうが、ここではその事にも觸れないことにする。

さて古代の巴蜀について考察する場合、つねに注意せねばならぬのは、(一)、北の陝西省漢中地域、(二)南の雲南省、(三)東の湖北省西部山岳地域であり、その他(四)湖南省、(五)貴州省の各地域の一部も入つてこよう。特に(一)～(三)は重要である。

(一)陝西省漢中地域は、いまでこそ陝西・四川と二つの異つた行政区畫に入り、全く別の地域のように思われがちであるが、元來は巴蜀と漢中是一个のまとまりをなす地域と考えられてきていた。

漢中は秦嶺山脈と巴山山脈の間にある盆地で、漢水がこの盆地を東から西にと流れている。この川は陝西省の南西蟠冢山に源を發して、上流では漾水と呼ばれ、沔縣を過ぎてからは沔水と稱され、湖北省漢口において長江に合流する。

漢の武帝の時、十三部刺史が設けられると、漢中は巴・蜀らとともに益州部に入れられて、後漢もそれを受けついでいる。晉になると、漢中は巴とともに梁州に入り、蜀は益州に入る。常璩の華陽國志も當然この區分を襲っており、卷一に巴志、卷二に漢中志、そして卷三に蜀志を配している。

唐になつても、漢中は巴とともに山南西道に入り、蜀は劍南道に區分されている。ただし漢代までの巴の一部は劍南道に屬していた。宋代に入ると、漢中を含む利州路は嘉陵江流域をもその中に含んで、成都府路(益州路)潼川府路(梓州路)、夔州路と並んで、川峡四路と呼ばれ、結局これを省略して四川の名になったこと、日知錄卷三十「四川」に言う如くである。

元代に漢中は陝西等處行中書省の領域に入り、漢中の地と巴蜀の地は行政的に全く分離してしまつたのである。

このように元代まで漢中と巴蜀は行政區分の上から同じ地域に配されていた。

(二)雲南省についても同様のことが言えるわけで、漢代には益州郡として、漢中・巴蜀と同じ益州部内にあった。晉代には寧州となったが、常璩は卷四に南中(寧州)志を置いて、卷三の蜀志につづけている。ここは漢代の西南夷の地で、中國の王朝の支配下に入っても非漢民族の活躍する所であった。

(三)湖北省の西部山岳地帯。即ち長江が三峡の險を通して、湖北平原に至るまでの間も、古代の巴の文化と非常に關係が深かったようで、後漢書南蠻傳には、巴郡南郡蠻の存在が伝えられているが、南郡は湖北省の西部に設けられた郡である。また新石器時代の遺跡の分布も、この兩地域の一體性を示すようである。

最後に貴州省は西南夷の住地として、湖南省は後漢書南蠻傳に見えるいくつかの民族の活動する舞臺として、巴蜀との連關を抜きにして考えられぬ地域である。^⑤

二 華陽國志と蜀王本紀

四川の古代史を文獻上から再構成するには、序にも述べたように、華陽國志に依るよりほかない。華陽國志は四世紀のなかばに、常璩がそれまでに書かれていた多くの資料を利用して、著わしたものである。^④その古代の部分はかなり整理され、それなりに合理化されているように思う。こうした合理化、整頓化の過程の中には、四川の中原に對する對抗意識が強く働いていた。

周失綱紀、蜀先稱王、

とか

七國稱王、杜宇稱帝、

といった記事がこれを物語ろう。したがってこの記事が華陽國志にあるといつて、ただちに蜀が王を稱したのは東周の初

期であり、杜宇が帝を稱したのは、戦國の始と一致するとして、その年代を決定することは出来ないと思う。

さて華陽國志が材料としたものの中、清朝の學者によつて佚文が集められた書に、揚雄蜀王本紀がある。いま嚴可均編の「全上古秦漢三國六朝文」の全漢文卷五三に收められている。

この揚雄蜀王本紀は、前漢書の揚雄傳や、同じく藝文志にその名が見えぬ所から、揚雄の作ではなく、彼に假託したものとされている。一體揚雄は蜀郡の人であり、その作品の中に「方言」「蜀都賦」などがあるため、蜀王本紀も彼に假託されるに至つたのであらう。それではいつのころに、この書が作られたかということになるが、これは考えることができない。しかし揚雄の時代、すなわち兩漢交替期を過ぎることそう遠くないとして、あまり見當外れにはなるまい。

さて蜀王本紀は今も述べたように、清朝の學者によつて佚文が、主として類書から集められて残っているのに過ぎないが、華陽國志に較べると、未整理であつて、それだけ後世の人の手があまり入っていないように感ぜられる。ということが、それだけでもとの傳承に近いものを含んでいるように思う。私は以下この二つの資料を使って、秦が巴蜀を支配下に入るまでの巴蜀の古代史を再構成したいと思うが、その前に、蜀王本紀の佚文の中の關連記事を、嚴可均の編纂した順に従つて、次に列舉する。なお數字は私が便宜のために附したものである。

(一) 蜀之先稱王者有蠶叢柏濩魚鳧案文選蜀都賦劉注引下有蒲澤二字開明是時人萌椎髻左衽不曉文字未有禮樂從開明已上至蠶叢積三萬四千歲文選蜀都賦劉注魏都賦劉注王元長三月三日曲水詩序注御覽一百六十六 案御覽引作凡四千歲

(二) 蜀王之先名蠶叢後代名曰柏濩後者名魚鳧案初學記八藝文類聚六御覽一百六十六引作次曰伯雍又次曰魚鳧此三代各數百歲皆神化不死其民亦頗隨王化去魚鳧田于湔山得仙今廟祀之于湔時蜀民稀少御覽一百六十六又九百一十三

(三) 後有一男子名曰杜宇案史記三代世表索隱引作朱提有男子杜宇從天墮止朱提有一女子名利從江源井中出爲杜宇妻乃自立爲蜀王號曰望帝案御覽一百六十六引下有移居邦邑四字治汶山下邑曰郫化民往往復出文選思玄賦注御覽一百六十六又八百八十八

(四) 望帝積百餘歲荊有一人名黿靈案後漢書注文選注引作黿令其尸亡去荊人求之不得黿靈尸隨江水上至郫遂活與望帝相見望

帝以鼈靈爲相時玉山出水若堯之洪水望帝不能治使鼈靈決玉山民得安處鼈靈治水去後望帝與其妻通慚媿自以德薄不如鼈靈乃委國授之而去如堯之禪舜鼈靈卽位號曰開明帝帝生盧保亦號開明 後漢書張衡傳注文選思玄賦注御覽八百八十八又九百二十三事類賦注六

(四) 望帝去時子鵲鳴故蜀人悲子鵲鳴而思望帝望帝杜宇也後天墮御覽九百二十三

三 三皇と蜀

華陽國志蜀志によると、蜀の肇國は人皇の時にあり、くだって黃帝の子孫がここに封ぜられたとするが、これはそのまま信ずることは出来ない。又蜀王本紀には人皇云々のことは見えていない。さて華陽國志は次のように書き始める。

蜀之爲國、肇於人皇、與巴同囿、至黃帝、爲其子昌意、娶蜀山氏之女、生子高陽、是爲帝嚳、封其支庶於蜀、世爲侯伯、

といった常璩が人皇を持ち出したのは、緯書によったものである。即ち華陽國志巴志を見ると、

洛書曰、人皇始出、繼地皇之後、兄弟九人、分理九州爲九囿、人皇居中州、制八輔、華陽之壤、梁岷之域、是其一囿、囿中之國、則巴蜀矣、其分野與鬼東井、其君上世未聞、五帝以來、黃帝高陽之支庶、世爲侯伯、

と記している。

この洛書というのは、それ自體が神怪な書であるが、ここに引く洛書は洛書緯のことであろう。洛書緯には「洛書甄曜度」、「洛書靈准聽」、「洛書摘六辟」、「洛書錄運法」などがあったこと、明の孫穀が輯めた佚文によって知ることができるが、その佚文に常璩の引いた文章は見出すことができない。わずかに、段玉裁がその說文解字注「囿」の所に、「常道將（璩、字は道將）引洛書曰」としてこの文章の一部を引くだけである。これは段玉裁が華陽國志巴志から引いたものであり、段玉裁はもちろん洛書については何も述べていない。

ところで華陽國志が引いた洛書には九州説が展開されている。九州説は「尚書」禹貢、「逸周書」職方氏、「爾雅」釋地、「呂氏春秋」などに見え、その何れも戰國末以降のものである。^⑤また分野説も述べられている。この分野説は「淮南子」天文訓、「史記」天官書などに、

東井與鬼秦也

とか

東井與鬼雍州

とあるのに一致する。

ところでここにもう一つ考えねばならぬのは人皇のことである。人皇を天皇・地皇と並べて三皇とすることは、やはり緯書に始つたことのように、「春秋命歷序」がその代表的なものとして、しばしば引用される。漢代に入ってからこうした考え方が現れるのであるが、とくに前漢の末ごろ、天皇・地皇・人皇の三皇説がさかんに稱えられたようである。^⑥

このようにみてくると、常璩の引いた洛書緯は前漢末ごろに成立したものであらうか。そしてこの前漢末というのは、政治的にみると、公孫述の大成國が成立したときであつたし、「揚雄蜀王本紀」と稱されるものが著わされ、巴蜀の地に一種新興の氣運の兆し始めた時にもあたつてゐる。^⑦巴蜀の人はその肇國を遠く人皇にまでさかのぼらせるのに、かつこの材料を、洛書緯に見出したのであらう。こうして巴蜀の肇國は人皇に始るとの説が出され、常璩もその説をうけついで、華陽國志に採用したのであるまいか。

四 五帝と蜀

つぎに黃帝の子孫が巴蜀に封ぜられたという點を考えてみよう。黃帝の子昌意が蜀山氏の女を娶つたということは、すでに史記にも見えるところである。ただし史記では黃帝と蜀山氏との間に生れた高陽は帝瑞頊となつており、帝嚳は同じ

黃帝の子孫ではあるが、黃帝の子玄囂の孫——黃帝から言えば曾孫にあたる高辛の事としてある。華陽國志が高陽を以て帝嚳とするのは、誤ったものか、或はそういう異説が一部に存したものでないかであらう。

それはともかくとして、祖先を黃帝に求めることは、中國では早くから行われていたことで、巴蜀だけに特に見られる現象ではない。史記の本紀や世家を見れば、春秋戰國の諸國はほとんどその祖先を黃帝と結びつけているから、巴蜀と黃帝の結びつきは、恐らく人皇に巴蜀を結びつけるより早く、戰國のころにあったであらう。

ついで巴志に引く洛書は、

及禹治水、命州巴蜀以屬梁州、禹娶於塗山、辛壬癸甲而去、生子啓、呱呱啼、不及視、三過其門而不入室、務在教時、今江州塗山是也、帝禹之廟銘存焉。會諸侯於會稽、執玉帛者萬國、巴蜀往焉、

と、禹が塗山に娶って子啓をもうけた話、この塗山は江州（今の重慶）の塗山であること、禹が諸侯を會稽に集めたとき、巴蜀も之れに参加したことを述べるが、勿論これをもって、夏の時代に巴・蜀二國が存在していたということにはならない。

いったい禹が諸侯を會稽に集めたということは、史記にも見えるところであるが、尙書には見えず、吳越春秋・越絶書などに出てくるので、或いはいまの浙江地方に生れた説話かも知れない。また後にも觸れるが、春秋左氏傳には、禹が諸侯を會した山が塗山になっている。（哀公七年）

つぎに禹が塗山の女を娶り、結婚後わずか四日にして治水に出かけたことは、尙書益稷にも見えるところである。

予創若時、娶于塗山、辛壬癸甲、啓呱呱而泣、予弗子惟荒度土功、

傳曰、塗山國名、懲丹朱之惡、辛日娶妻、至于甲日、復往治水、不以私害公、そのほか禹が塗山の女を娶ること、先秦の書としては呂氏春秋・楚辭にも見える。

禹三十、未娶、行到塗山、恐時之暮、失其度制、（中略）因娶塗山、（吳越春秋）

禹行功。見塗山之女。禹未之遇。而巡省南土。塗山氏之女。乃令其妾候禹于塗山之陽。（呂氏春秋 季夏 音初）

禹之力獻功。降省下土方。焉得彼姁山女。而通之于台桑。（楚辭 天問）

ここで問題として取りあげたいのは、この塗山が江州にあるという傳説である。先にも述べたように、左傳哀公七年に

禹合諸侯於塗山、執玉帛者萬國、

とあり、杜預は

塗山在壽春東北

と注した。それ以後、塗山という山は、この安徽省の塗山の外にも幾つかあり、重慶附近の山もその一つであるわけだが、禹の塗山は壽春の塗山ということになってしまった。蔣廷錫の「尚書地理今釋」や江永の「春秋地理考實」など皆然りである。しかし一方では塗山という山があれば必ず禹と結びつけられたようで、浙江省紹興縣の西北にある塗山も「禹が妻を娶った山」とされるし、江州（重慶）の塗山も亦その一つの現れであって、後世の附會とすればそれまでであろうが、このように考えるのは禹を唯一人の人物（或は神）とした場合で、中國各地に禹或はそれに似た屬性を持つものがある、現在我々が禹と呼んでいるのはその集合體であると考えた場合、状況は少し違つてこよう。一體禹に關する説話は、堯・舜に比べて、南方のものが多し。今問題にする經書もそうであつたかも知れないし、吳越春秋・越絶書には必ず禹の話が出てくる。禹は蛇龍の意を表すといひ、そのこと自體はなほだ南方的である。長江流域に、こうした水神の信仰が廣く存在し、巴蜀の地にもあつたとしてもそう不思議ではあるまい。

また洛書では、禹の子啓が江州の塗山で生れたことになっているが、蜀王本紀や吳越春秋では、禹が蜀地で生れたことになっており、華陽國志もその説を取っているが、禹の石紐林については先人に論考があり、ここではこれ以上觸れない。しかし禹と啓に共通して、母の胎を切りひらいて生れた話、啓母石があること、啓の名が開くを意味することに注意すると、のちの開明との關聯が考えられる可能性のあること、換言すれば、巴蜀の土着文化に基づくことも考えられるこ

とを併せ指摘して、以下禹の出生についての原文を示すに止める。

禹本汶山郡廣柔縣人、生于石紐、其地名剽兒畔、禹母吞珠、孕禹圻副、而生于縣、塗山娶妻。生子、名啓、于今塗山有禹廟、亦爲其母立廟、（史記夏本紀正義、初學記、太平御覽等引蜀王本紀）

禹父鯀者、帝顓頊之後、鯀娶於有莘氏之女、名曰女嬃、年壯未暮、嬃於砥山、得意苴而吞之、意若爲人所感、因而妊孕、剖脅而產高密、家於西羌、地曰石紐、石紐在蜀西川也、（吳越春秋卷六）

廣柔。夷人營其地方百里、不敢居牧、有過逃其野中、不敢追云、（後漢書地理志集解引華陽國志）

ただここで一つ注意されるのは、「某山の女」或は「降居某水」というような表現のあることである。

史記には五帝本紀黃帝の條に、

嫫祖爲黃帝正妃、生三子、其後皆有天下、其一曰玄囂、是爲青陽、青陽降居江水。其二曰昌意、降居若水、昌意娶蜀山氏女。曰昌僕、生高陽……

とある。正義は括地志を引いて、

括地志云、安陽故城、在豫州新恩縣西南八十里、應劭云、古江國也、地理志亦云、安陽古江國也、と云うが、司馬貞索隱は、

江水若水皆在蜀

と、江水・若水を蜀にあるとしている。

また炎帝神農については

炎帝神農母曰、佳姒、有嬌氏女名登、少典妃遊華陽、有龍首感之、生神農於褒羊山、娶奔水氏女曰聽訞、（太平御覽

一三五引帝王世紀）

桀の妃については

后桀伐岷山、岷山女子桀二人曰琬、曰琰、（太平御覽一三五引竹書紀年）

以上が傳説上の皇帝或は妃の記事の中、「某山の女」とか「降居某水」とあるものである。ところが華陽國志には

武都有一丈夫、化爲女子、美而豔、蓋山精也、蜀王納爲妃、

という話があり、蜀王本紀には、前引(三)のような説話がある。（四一頁）

これらの話に、さきの禹の塗山が江州にあるとの説を加えると、これらがいずれも巴蜀の地に關係することになる。これは或いは單なる偶然に過ぎぬかもしれないけれど、私はこの地に、山神崇拜、或は先祖は河の上流或いは山より降つて來たという傳承が廣く存在していたのではなからうかと思う。この場合、降居というのは、史記の司馬貞索隱に、

降下也、言帝子爲諸侯、降居江水若水、皆在蜀、卽所封國也、

とあるように、いわば臣籍降下と考えるのではなく、日本の天孫降臨のように、神の降下という意に考えているのであることを斷つておく。この點では、蜀王本紀がよく原意を傳えているのではあるまいか。

五 西周と蜀

周の武王の牧野の戦に、蜀もその一翼をになつてゐること、尙書牧誓に見え、あまりにも有名なことであるが、順序として觸れておく。

王曰、嗟、我友邦豕君、御事司徒司馬司空、亞旅師氏、千夫長百夫長、及庸蜀羌髳微盧彭濮人、稱爾戈、比爾干、立爾矛、予其誓、

これは牧誓の一部であるが、ここに出てくる庸以下濮までは僞孔傳以來、多くの注釋家によつて、巴蜀漢中湖北西部にあつた國として理解されてきた。例えば

八國皆蠻夷戎狄屬文王者（傳）

の如くである。蜀を果して國ととらえてよいかどうか、國とすれば華陽國志に出てくる王（朝）名のどれにあてゐるかなどの問題が出てこよう。しかし、殷周の頃に、いまの成都附近に蜀と呼ばれる國、或いは民族がいたということは、始めは書經に出てくるからというだけの理由から肯定されていたが、いまでは種々の面から考えて、蜀の地に國あるいは何らかの社會集團の存していたことは、ほぼ斷言して差し支えないであろう。ただ經書及びその他の史料には、西周の初期から約七世紀の間、即ち秦との交渉がはじまるまで、蜀の名はどこにも出てこない。そのことを華陽國志は、

有周之世。限以秦巴、雖奉王職、不得與春秋盟會君長、莫同書軌、

と記して、中原とは異質の文化の存在を示唆し、中原の文化圏の外側にあったとして解決している。

ところで牧誓には、巴の名は見えない。しかし牧誓に出てくる八つの國（民族名）の中には、巴の地に存在していたものがいくつか指摘できるので、ただ巴という名で呼ばれていなかったということに考えておく。

洛書では

周武王伐紂、實得巴蜀之師、著乎尙書、巴師勇銳、歌舞以凌、殷人前徒倒戈、故世稱之曰、武王伐紂、前歌後舞也、
というが、これは牧誓の記事と、漢の高祖の時の「巴渝舞」の記事から、作り出されたものではないかと考える。尙書牧誓には、前引の文からも分るように、巴の名は見えていない。

しかし春秋時代を通して、巴の名は春秋左傳などにも見え、かえって巴の存在は楚との交渉もあり蜀よりも早く中原に知られていたようである。巴は子爵姬姓の國とされるが、これは吳や晉が姬姓の國とされるのと同じようなことで、後世の附會であらう。

六 蜀第一王朝

1 概論

この章では、華陽國志と蜀王本紀の記事から、蜀の古代の傳承を考えてみたい。

華陽國志は、今までに見て来たように、巴蜀の古代史を非常に手ぎわよく整理している。即ち最初に洛書に展開された世界があり、つぎに「周失綱紀」という事件があつて「蜀に先づ王を稱した」蠶叢・柏灌・魚鼻そして杜宇とつづく一系の王朝があり、杜宇の時に「七國王を稱し、杜宇帝を稱する」というまた大きな事件があつて、開明（叢帝）、廬帝、保子帝、そして九世後に再び開明帝と連る第二の系列をなす王朝（假りに蜀第二王朝と呼ぶ）があつて、秦に併合されるという形をとっている。そして第一王朝と第二王朝をつなぎ合わせるものが、舜—禹に行われたと同じ、治水の功を認めての禪讓である。しかし前にも述べたように、「周失綱紀、蜀先稱王」「七國稱王、杜宇號帝」は、黃帝を自己の祖先に持ち出し、或いは禪讓傳説の存在を誇示すると同様に、中原に對する自尊心から生れたもので、この紀年が明らかな記事によつて、二つの王朝の存立年代を決定することは、甚だ危険であらう。

一方蜀王本紀の方はどうであらうか。四一頁の文からも分るように、蠶叢から始る第一王朝、杜宇の時代、開明から始る第二王朝と三つに區分される。そして第一王朝から杜宇への交替はどのようであつたか、全くふれていない。杜宇から開明への移行は、禪讓によるものとなっている。そしてこれらの時代はすべて明らかでない。「三萬四千年」とか「四千年」とかといった。漠然とした表現がなされているに過ぎない。恰も我國の神武より崇神に至る人皇十代の如くである。

しかしいづれにせよ、秦による巴蜀征服がなされた時には、蜀王朝が存在していたことはほぼ間違のないところであるし、また傳承の記事と考古學的遺物から推察して、春秋末期ごろから、巴蜀に王朝の存在したことが考えられよう。

2 蠶叢

華陽國志、蜀王本紀ともに、蠶叢を第一王朝の始祖におくこと同様である。

この蠶叢の名義であるが、蠶はいうまでもなく、「かいこ」である。叢は叢祠の叢であろうか。「墨子」明鬼篇に昔者虞夏商周三代之聖王、其始建國營都日、必擇國之正壇、置以爲宗廟、必擇木之脩茂者以爲敢位、とあり、敢の字は叢と解されている。また「墨子閒詁」には

敢與叢同、位當爲社字之誤也、……………顏師古曰、叢謂草木岑蔚之所、因立神祠、卽此所謂擇木之脩茂者、立以爲敢社也、秦策恆思有神叢、高注曰、神祠叢樹也、

とある。またかつてシャバンヌ氏は、「古代中國における土地神」の中で、

「土地神は孤立した木ではなくて、神聖な森であった。」

と述べている。蠶叢とは、蠶を神格化したもので、いかに蜀錦の國の始祖にふさわしい名稱である。四川省では現在でも、山まゆがむらがつて木にさがっているとの事である。

さて華陽國志によると蠶叢について

其目縦、始稱王、死作石棺石槨、國人從之、故俗以石棺石槨爲縦目人家也、

とある。縦目とは何であろうか。楚辭招魂には、

魂兮歸來、君無上天些、虎豹九關、啄害下人些、一夫九首、拔木九千些、豺狼從目往來僂僂些、

とあり、注に

豺狼之獸、其目皆從、作縦、補曰、南北曰從、

と見える。又同じく楚辭大招に、

魂乎無西、西方流沙、漭洋洋只、豕首縦目、被髮鬢只、

とあって、

縦一作從、補曰、南北曰縦、

と注する例が見える。又、山海經大荒北經には、

西北海之外、赤水之北、有章尾山、有神人面蛇身而赤、直目正乘、其瞑乃晦、其視乃明、不食不寢、風雨是調、是燭九陰、是謂燭龍。

なる一文ありて、その注に

直目目從也

とする。この直目も從目と同じ意味のようである。目が縦についているという意であるが、恐くは目にいれずみを施したものをさすのではないであらうか。こうした風俗を蠶叢を始祖神と仰ぐものは持っていたことを傳えているのであらう。

つぎに、石棺石槨を縦目人の冢とすることを考えて見たい。この「故俗以石棺石槨爲縦目人家也」という華陽國志の言い方からは、ある特定の石棺石槨をさして縦目人の冢としたのではなく、普通に見られる石棺をば縦目人の冢とするという意に取れそうである。そうすると縦目人というのも、特定の個人でなく、蠶叢によって代表される一つの集團を指すものと考えられてくる。

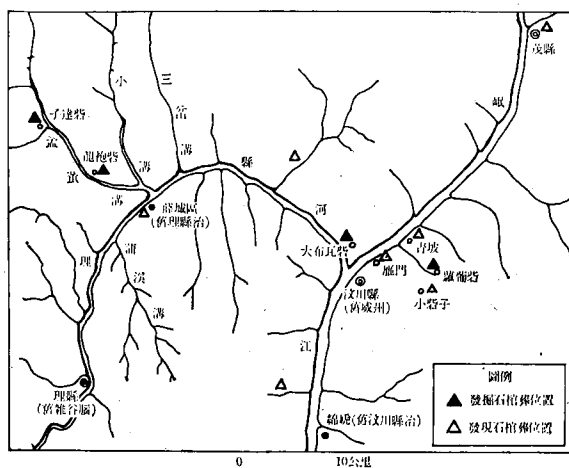
では、石棺石槨が、時代を常璽が華陽國志を編纂した晉代まで下げて、巴蜀の地に存したか否かということを見て行きたい。

概して言えば、巴蜀のみならず中國に於いて、石棺石槨の存在は稀であるようだ。^⑤ところが「考古學報」(一九七三—二)に載せられた馮漢驥・童恩正「岷江上游的石棺葬」によると、岷江上流の阿坝藏族自治州に屬する茂縣・汶川・理縣三縣の領域から密集した状態で、石棺葬が発見されたという。

此の領域はさらに限定すると、西は理縣蒲溪溝(今薛城西約二十キロメートル)、南は汶川縣の綿虜(舊汶川縣治)、北は茂縣附近までになり、岷江・雜谷腦河とそのいくつかの支流の兩岸に限定される。

此の地域に石棺墓の存在していることは、すでに馮漢驥が一九三八年八月〜十月にかけての調査で明らかにしたし、鄭

德坤と The Slate Tomb Culture of Li-Fan (Harvard Journal of Asiatic Studies, 1946—june) なる論文によつて、理番地區の石棺墓を紹介している。



岷江上游石棺墓分布圖 (考古學報1973年第2期より)

さて「考古學報」の馮氏の論文は、一九六四年三月の調査に基づいたものである。この時の調査では二十九座の遺跡が發掘された。その中の二十三座が理番薛城區子達砦、一座が龍袍砦と、二十九座中の八十%にあたる二十四座が雜谷腦河の支流孟董溝流域に集中している。残りの五座は汶川縣大布瓦砦に二座、蘿葡砦に三座（その中の一座は、一九三八年發掘のもの）存する。

以上は今回の調査が行われたものであるが、その他、薛城以西の蒲溪砦（これはD. C. Graham によつて調査された）、綿虎對岸の河坪、孟董溝上流の塔思坝、日鉢則、老雅砦、沙家砦等の地にも、大量の石棺墓が存在するよし記されている。

この石棺墓から出土したものは次の通りである。

(一)、土器——双耳罐——Ⅱ式。單耳罐、高頸罐、簋形器、單耳杯、陶碗、孟杯形器、小罐、紡輪、泥形器、

(二)、金屬武器——銅劍、銅柄鐵劍、銅戈、銅鉞、鐵斧、鐵柔、鐵刀、鐵鋸片、銅連珠鈕、銅盔旒座、銅盔旒座、銀臂鞬、

*この銅柄鐵劍は、石棺葬副葬品の中で、もっとも特徴的なものであつて、その銅柄の部分は、この地で鑄造されたもので、長城地帯から數多く出土する銅柄鐵劍と柄の形は全く違つてゐるとしている。

(三)、飾器金屬服——銅扣、銅泡飾、銅帶鉤、銅牌飾、金銀頂飾、

(四)、銅錢——半兩錢一三一枚、內四五枚は文帝四銖半兩、残りは呂后八銖半兩、

(五)、其他の服飾品——琉璃珠、珉玉珠、石环、野猪牙、骨飾（これは工具かも知れない）、麻布、

(六)、糧食作物——粟稷屬（*Panicum*）

次この石棺葬文化の年代について、鄭德坤氏は、鐵器の存在、中國他の地域の出土遺物との比較、銅錢の出土と言ったところから、この遺跡の時代を紀元前五百年より紀元前百年の間とみたが、馮氏は下限を、出土した半兩錢から、前一七五ヶ前一八十年の間とし、その上限は、戰國末期、秦漢の際と、非常に巾せまく見ているようである。^⑤

次にこの石棺文化を所有したのはどの民族かということになるが、これはにわかに斷定することはできないが、この遺跡の埋葬狀態から見ても、二次葬ないし火葬の風習も見られること、太平御覽四夷部引莊子、呂氏春秋義賞篇、後漢書西南夷傳冉駹の條などに、羌人に火葬（焚尸）の風俗があることを記していることなどから、かなり羌族の影響があったのではないかとしている。それは兎も角、華陽國志に縦目人の冢と結びつけられていた石棺石槨が、この岷江上流の石棺文化であった可能性は、考えておいてよいであろう。このことを推測させるもう一つの理由は、西漢より晉に至るまで、蠶陵縣という縣が存していたことが、地理志から分る。この縣は疊溪營にあたる所に存したとされている。^⑥そして疊溪營は、馮氏が石棺石槨が出ると指定した範圍より、少し北あたり、禹の生れたという傳のある石紐（漢代の廣柔縣）より南に位置する。蠶陵という名は、蠶叢の陵を想起させる。しかし、この石棺葬の被葬者を、蠶叢と彼から始る、私がここに第一王朝と名づけた王のものとすることはできない。むしろこの石棺葬を後世蠶叢と結びつけたとするか、もし両者が一致するとするなら、第一王朝の存在を古くするために、古傳説中の整理中に、時代を逆上らせたとみるべきであろう。

蠶叢の次は柏灌（蜀王本紀には柏灌）、その次は魚鳧である。柏灌については何の傳えもない。柏はかつて私が「三都賦札記」（聖心女子大學論叢三十四集）に觸れたように、左思蜀都賦に

松柏蒼鬱於山峯

とあって、巴蜀の地を代表する木の一つであると同時に、論語八佾に

哀公問社於宰我、宰我對曰、夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗

とあるように、社の神體ともなる樹木である。柏灌（灌）の意味は明かでないが、柏樹を神木とする觀念の現れとも見ることができよう。柏はいうまでもなく、「カシハ」でなく「ヒノキ」科の木である。

蠶叢・柏灌が陸地に關係が深いのに對し、つぎの魚鳧は水上と因縁がある如くである。魚鳧については

魚鳧王田於湔山、忽得仙道、蜀人思之、爲立祠、（華陽國志蜀志）

魚鳧田于湔山得仙、今廟祀之于湔、（蜀王本紀）

と、仙人になったという傳説を持つてゐる。のちにこの巴蜀の地に、五斗米道が生れることになるが、その基盤はこういう話にも見られることになるのであろうか。なおついでに言えば

王喬者河東人也、顯宗世爲葉令、喬有神術、每月朔望、常自縣詣臺朝、帝怪其來數而不見車騎、密令太史伺望之、言其臨至輒有雙鳧、從東南飛來、於是候鳧至、舉羅張之、但得一雙鳧焉云々（後漢書八十二上方術傳王喬傳）

という話があつて、鳧は仙人の鳥となっている。鳧と仙人はこうして見ると結合し易い要素であつたらしい。

つぎに蜀王本紀の一本には蒲澤・開明の名が見えるが、華陽國志では、蒲澤は杜宇の一名とされ、開明は蜀王本紀・華陽國志ともに、秦に亡された第二王朝の系列に頻出する名であるから、恐らくこの二つの王朝が混亂して、ここにまぎれ込んだものであろう。

さらに蜀王本紀には、四一頁（一）に見えるように、

是時人萌椎髻左衽、不曉文字、未有禮樂

と、この時代の風習を述べるが、これは正史西南夷傳に共通に見られる表現方法で、こうした表現をとったのは正史西南夷傳の影響の下に作られたからであろうが、内容から言えば、蜀の第一王朝は、こうした西南夷の要素を盛るにふさわしかった文化であつたろうこと言うまでもない。

4 杜 宇

つぎに杜宇である。杜宇は華陽國志の方では、

後有王曰杜宇、教民務農、一號杜主、時朱提有梁氏女利遊江源、字悅之、納以爲妃、移治郫邑、或治瞿上。

七國稱王、杜宇稱帝號、曰望帝、更名蒲卑、自以功德高諸王、……會有水災、其相開明、決玉壘山以除水害、帝遂委以政事、法堯舜禪讓之義、遂禪位於開明、卒升西山隱焉、時適二月、子鵲鳥鳴、故蜀人悲子鵲鳥鳴也、巴亦化其教、而力農務、迄今巴蜀民農時、先祀杜主君(當作若)開明(當重有開明二字)位、……

と見え、蜀王本紀では第三、五條に關連の記事がある。(四一頁參照)

さて杜宇は、杜主、望帝、薄卑など種々の名で呼ばれ、さらに死後は杜鵑鳥となつたと傳えられるが、この人物の基調をなすのは、その農業神的性格であろう。先に引いた華陽國志の文章を、顧廣圻の校定に従つて讀むと次の様になるであらう。

今に迄およぶまで、巴蜀の民、農時には、先ず杜主を祀ること、開明のごとくす。

即ち杜主は開明と並び、農業神として祀られていたことになる。杜主と開明は果して、華陽國志や蜀王本紀に言う如く、杜主が先ず農業神として先行し、開明は後れてきたものと斷定しうるか否か問題はあるが、蜀地にまず土着の農業神として存したものであることは疑いなからう。なお巴のみでなく、華陽國志よりさらに數世紀おくれ出て出來た荆楚歲時記

には、

三月三日、杜鵑初めて鳴く、田家之を候とす。此の鳥、晝夜、口赤く、天に上りて恩を乞ふ、

など見え(爾雅翼引)、廣く長江流域において、農事を告げる鳥としてみられていた。また杜宇の別名としてあげられる蒲卑は、前にも述べた如く、蜀王本紀の一本には、文字が少しく異っているが、別の獨立した王名ともされている。かつて小川琢治博士は

「杜宇王の名は蒲卑又は蒲卑となつて、今の華陽國志に見えて居るが、文選の蜀都賦劉良の注には蒲澤となつて居る。此等を合せ考へると恐らくは何れも誤で原とは皋の字であつたのが、卑ともなり畢ともなつて、終に郫や澤になつたのであらう、序に注意して置く。

(支那歴史地理研究第六章、天地開闢及洪水傳說 頁一九九)

と述べ、その原名を皋とされた。小川博士は皋については何等説明をされていないが。蒲が水草であり、皋が澤の意であるとする、いづれも濕地に關係のある言葉で、このような「濕地を農地化した神」の意かとも思われる。もともと杜宇とは別の神格であつたが、兩者とも農業神的性格があるところから、同一視されるに至つたのではあるまいか。

さてこの杜宇であるが、華陽國志には朱提(四川省宜賓縣)、即ち岷江と長江の合流點にあたる有梁氏の女利が、江源とあるから、岷江を逆上つて來たのを迎えて結婚したとなつてゐる。

ところが、蜀王本紀では前引四一頁の第(三)條に見えるごとく、杜宇は天からおりて來て朱提に止つた。朱提には女子で利というものがいて、江源の井中から出て杜宇の妻となつたというのである。また蜀王本紀(四)では天墮(天よりおつ)となつてゐる。

これは神が天から降ります、——そのよりしろには、樹木、石などが考えられる——という開祖傳説の類型に入る。この降るは勿論、降嫁の意味ではない。そして彼は井中より出た女と結婚する。井中或は洞穴中より先祖の出現する話は、この地方に多く分布していることを私はかつて論じた。こうしてみると、華陽國志より揚雄本紀の方が、もとの形を残し

ているように思う。なお史記三代世系表索隱の蜀王本紀に

朱提有男子杜宇

とあるのは、また一の變型であろう。

いずれにせよ、この話は蜀の勢力が岷江沿いに下って、長江の流域に廣がっていったことをまた示すと思う。こうして、東方の巴或はさらに楚との関係も生れてくるであろう。こうして長江を溯上った屍體鼈靈（即ち開明）との出會いとなるわけである。

最後に華陽國志・蜀王本紀とも、杜宇と女利との結婚後、都が郫に移ったと記すし、華陽國志ではさらに「或治瞿上」^⑧とも記す。郫、瞿上はそれぞれ現在の四川省郫縣、雙流縣にあたると思われる。それぞれ成都の西北、西南にあたる。第一王朝の中心地はしだいに岷江を下ってきたと見ることも出来よう。そして華陽國志に杜宇（望帝）の時代の治政範圍を記して、乃以褒斜（陝西省褒城・郿縣一帶）爲前門、熊耳（四川省青神縣）靈關（四川省蘆山縣？）爲後戶、玉壘（四川省灌縣）峨眉（四川省峨眉）爲城郭、江潛綿洛爲池澤、以汶山（四川省茂縣）爲畜牧、南中（長江の南、雲南に及ぶ）爲園苑、

とあるのは、南中という語が三國以前に使われぬ語なので、これをそのまま杜宇時代のものであることは認めにくい。蜀の地域にあっては、先ず岷江流域に南北に渡ってその勢力圏が出来上っていったであろうことが、十分考えられる。

むすび

以上述べたように、巴蜀の地は南北に流れる山脈によって分斷されている。岷江流域には、すでに人皇のころより、國家が成立していたように見えるが、それは緯書の記述によったもので信じがたい。その後も五帝三代に關わる時代の記述は、周の武王の牧野の戦を除いて、實在性は甚だ疑わしい。蠶叢から始る第一王朝も、後世の巴蜀史の合理化の中から、加上の原理による作爲の跡が感じられる。しかし、こうした文獻史料のはしばしに、巴蜀固有の傳承をかいま見ること

できよう。

禪讓によって生じた第二王朝から秦の巴蜀經營の時代による考察、また考古學的遺跡・遺物によるこの地域の新石器時代より金屬時代への展開といった問題については別の機會に述べたい。

註

- ① このことは本書及びその基となった論文の執筆時期からみて致し方あるまい。于豪亮「略評四川考古論文集」（考古一九五九・八）は、この書の書評であるが、于氏が「この書は解放後の多くの考古資料を利用していないので、全書の内容が非常に貧弱になったのは、惜しい事である。」というのは、稍酷な批評と思うが、「四川史前考古が本書の大部分を占めている。作者が他人の収集した極めて不完全の材料によっているので、遺址に對して、科學的な叙述ができず、このため、遺址の叙述がはなはだ簡略の嫌いがある」というのは、うなずける。なお作銘「書評、四川考古學論文集 鄭德坤著」（考古通訊、一九五七・五）は、きわめて簡単な紹介であるが、この文中にも「おいしいことには、彼はすでに發表された解放後出土の大量の考古材料を利用する機會がなかった」と言っている。
- ② 拙稿「後漢書南蠻傳小考」（史窗 32）
- ③ この節の記述には
 - アジア歴史事典（平凡社）「四川省」
 - リヒトホーフエン・能登志雄譯「西南支那」（岩波書店一九四三）

東亞同文館「新修支那省別全誌—四川省—」一九四一

神田正雄「四川省綜覽」（海外社一九三六）
らを參考とした。

- ④ 拙稿「華陽國志の成立をめぐる」（聖心女子大學論叢二二）
- ⑤ 小川琢治「上古地誌としての禹貢と山海經の價值」（支那歴史地理研究所收）
- ⑥ 内藤虎次郎「禹貢製作の年代」（研幾小錄所收）
- ⑦ 小島祐馬「分野説と古代支那人の信仰」（古代支那研究所收）
- ⑧ 楊寬「中國上古史導論」（古史辨第七冊）
- ⑨ 註④に同じ。
- ⑩ 史記夏本紀。禹は巡守して會稽にいたり、死んだことになっている。
- ⑪ 森安之助「縣禹原始」（黃帝傳說所收）
- ⑫ 岡崎精郎「石紐林と禹の誕生」（古代學一〇四）
- ⑬ 森三樹三郎「中國古代の神話」（大雅堂一九四四）
- ⑭ 禮記檀弓「天子之殯也敢塗龍輅以梓」の疏に「敢叢也謂用木叢棺而四面塗之故云敢塗也」と見える。
- ⑮ この點は出石誠彦「社を中心として見たる社稷考」（支那神話傳説の研究）にくわしい。
- ⑯ 駒井和愛「中國考古學論叢に「墳墓の研究」としてまとめら

れた諸論考

⑯ 文獻の上では

秦之先……中滴在西戎、保西垂、生蜚廉、蜚廉生惡來、惡來有力、蜚廉善走、父子俱以材力事殷紂、周武王之伐紂、并殺惡來、是時蜚廉爲紂作石椁於北方、還無所報、爲壇霍太山、而封得石椁、銘曰、帝命處父、不與殷亂、賜爾石椁、以華氏死、遂葬於霍太山、(史記五秦本紀)

⑰ 馮漢驥、「岷江上游的石棺葬文化」(成都工商導報一九五一年五月二十日)——未見

⑱ 「いくつかの墓葬中出土の土器は大體は同じであるが、しかし違いもかなりある。たとえば、泥杯形の器は子達砦で常に見られるが、他の遺址では見えない。高頸罐は、發掘されたもの收集されたものを包括して、わずかに蘿蔔砦にしか見えない。葬式上も亦このようであって、I式の仰身直肢葬は蘿蔔砦に見

えるだけで、二次葬及び火葬は子達砦に見えるだけである。此の種の差異は時代上、地域上の違からくるのかどうかは、サンブルの不足で、現在推知しにくい。各地の墓地の廣さ、墓と墓との間に又破壊、壓迫等の現象があるところから見て、時間上に先後がある。又墓中から全く石器が出てこないところから言つて、この墓葬の上限の年代はそう早くなく、おそらく、戰國末期と秦漢の際であらう」(馮漢驥、考古學報 五五頁)

⑲ 「八十里至靈陵縣」(原注、今疊溪營、補注、靈陵縣西漢置、

屬蜀郡、東晉後廢、疊溪營在松潘廳南二百三十里、明置疊溪守禦千戶所、國朝改爲營、)(陳登龍、朱錫穀補注 蜀水攷)

⑳ 拙稿「三都賦札記」(聖心女子大學論叢三)

㉑ 袁珂「中國古代神話」(商務印書館)では「魚鳧がはじめて都を瞿上に立て、後、郫に遷った」とするのは何によつたのであろうか。

with agricultural production (management) if it is to be correctly understood. The development of commercialized farming and the differentiation of the peasantry into rich peasants and poor peasants created the opportunity for feudal conditions of land tenure to give way to modern conditions. In the 1930's this possibility was hedged by a number of difficulties, a fact which constitutes the profound social background to the Guomindang 國民黨 road to modernization without passing through a violent revolution.

The Reconstruction of the Ancient History of Ba 巴 and Shu 蜀 --the Legendary Period

Naosada Kano

The region of Ba 巴 and Shu 蜀 entered into the development of history centering on the North China Plain in the late fourth century B. C. when it came under the control of Qin 秦. Consequently for the purpose of reconstructing the ancient history of Ba-Shu before that point there is no alternative but to follow the fragmentary notices which occur in the *Shu-jing* 書經 and the *Zuo-zhuan* 左傳 or else the *Hua-yang guo-zhi* 華陽國志 which was compiled in the middle of the fourth century A. D. Otherwise one must rely upon archaeological remains and artifacts. But studies in this latter area have not been adequately pursued.

The region which forms the subject of this article is limited to the eastern basin of Si-chuan 四川 province, and the *Hua-yang guo-zhi*'s entries for the legendary period of Ba-Shu history are examined with the aid of the *Shu-wang ben-ji* 蜀王本紀 ascribed to Yang Xiong 揚雄. The author concludes that although most of the material in the *Hua-yang guo-zhi* consists of the fabrications of later periods, it includes authentic traditions concerning this region.